

和解から生まれる平和

〔聖書〕詩編 85 編 9～14 節

わたしは神が宣言なさるのを聞きます。

主は平和を宣言されます 御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に
彼らが愚かなふるまいに戻らないように。

主を畏れる人に救いは近く 栄光はわたしたちの地にとどまるでしょう。

慈しみとまことは出会い 正義と平和は口づけし

まことは地から萌えいで 正義は天から注がれます。

主は必ず良いものをお与えになり わたしたちの地は実りをもたらします。

正義は御前を行き 主の進まれる道を備えます。

〔序〕歴史を振り返る

私たち夫婦は1995年5月にシンガポールに赴任しました。その年の8月15日の朝、現地の英字新聞を手にした時のショックをまだ鮮やかに覚えています。「アジアが日本から聞きたい唯一つの言葉」という第一面の大きな見出しが目に飛び込んできたのです。「我々アジアの人間が日本から聞きたい言葉は『We apologize(ごめんなさい)』だけなのに、どうしてそれが言えないのか。」そしてその後続く言葉です。「天皇裕仁が責任を取らなかったのだもの、それに続く政治家・指導者たちが責任をとろうとしないのは当然だろう」

そうです。あの時天皇は退位しませんでした。日本人だけで310万人の戦没者を出し、無数のアジア諸国民を痛めつけた戦争を自分の命令で開始したのです。天皇を退位させたら日本が混乱すると心配して占領軍のマッカーサー総司令官が引きとめたからだとか、日本の法律(皇室典範)には天皇退位の定めがないからだとか、いろいろ理由がつけられました。でも会社に不祥事が起これば、経営責任を問われて、社長は辞任していますよね。

戦後生まれの方たちには、昭和天皇は背広姿で「あっ、そう」と返事をしながら全国を回って復興に励む国民を励ました平和日本の象徴という存在でしょう。しかしあの8月15日まで私たちに刻み付けられた天皇の姿は、軍服の胸に最高位の大きな勲章を付け威風堂々と白馬にまたがる、陸海空三軍を統帥する大元帥陛下でした。そして歴史はじまって以来初めて国を敗北させたのです。その責任は万死に値するものではなかったでしょうか。

それにもかかわらず天皇は、日本の元首・総司令官大元帥としての責任をとりませんでした。そして私たち日本人はそれをあいまいにして、認めてしまいました。しかしアジアは50年経っても忘れていなかったのです。私は自分が置かれている立場の厳しさを目の当たりして、新聞をにぎったまま、身のすくむ思いに襲われたものでした。

今年には62回目の敗戦記念日でした。1931年に満州に侵略を開始して満州国を作り、1937年に中国と全面戦争を始めて、広大な中国大陸の全土に戦火を拡大しました。その結果諸国から経済封鎖の制裁を受けるや、1941年に米英らとの全面戦争を開始して3年8ヶ月、遂に無条件降伏して15年戦争は終結しました。広島・長崎だけでなく、東京も大阪も焼け野原になりました。アジア各地から大勢の兵隊が引き揚げてきます。食料不足で200万人が餓死するのではないかと言われましたが、占領軍諸国からの食料援助で危機を乗り越えることができました。

敗戦5年後の1950年に朝鮮戦争が勃発し、戦争用の特別物資買い付けにより、国内の産業が息を吹き返しました。更に1960年からのベトナム戦争が、日本の経済発展を確かなものにしてくれました。戦争でアジアに多大の苦しみを与えておきながら、アジアで起きた他国の戦争の悲劇で、日本は息を吹き返し経済大国になったのです。経済援助を世界で一番出来るようになるにつれて、私たち日本人は戦争中に犯した罪の数々を次第に忘れるようになったのではないのでしょうか。広島・長崎の被害は語り継がれてきていますが、アジア諸国への加害責任は、薄れていきました。それが教科書検定に如実に表れてきています。

内村鑑三は日清戦争の時には、正しい戦争だと主張して英文で外国の知人に訴えていました。しかしそれが間違っていたとわかり、10年後の日露戦争の時には非戦の立場に変わりました。彼はこう言っています。「戦争はすべての罪悪を総括したものである。罪悪之れ戦争なりと言うも少しも過言ではない」。私たちは、戦争という大きな罪を二度と繰り返さないために、15年戦争を決して忘れてはならないと思います。

[1]神の平和宣言

今日の聖書教育は、詩編85編です。1節に「主よ、あなたはヤコブの捕らわれた人を連れ帰ってくださいました」とありますから、ヤコブの子孫であるイスラエルの民が、50年にわたるバビロンの捕囚から解放されて、エルサレムの都に帰国出来たBC537年から神殿再建にとりかかるBC520年までの間の歌だろうと言われています。この17年間といえば、日本でいうと敗戦から東京オリンピック少し前の期間に当たります。

帰ってきてみると、町は50年前に破壊されたままであり、町を守る城壁が至る所で崩されています。先ず神殿を再建するとしても自分たちの住む家も確保しなければなりません。町の安全のために城壁の修理も欠かせません。周囲には彼らの帰国を喜ばず、妨害しようとする有力な敵対者が機会を窺っています。再建復興事業は容易なことではありませんでした。

直面する困難の大きさに、「解放された・故国に帰れた」という沸き立つ喜びが、次第に不安と恐れに変わり始めました。再建の意欲がしぼんでいきます。「神さま、エルサレムを復興させる事業など、とてもできそうにありません。神さまの私たちに対する怒りはまだ収まらないのでしょうか。主よ、私たちのもとに本当に帰ってきて下さい。慈しみを示して元気を取り戻させて下さい。」人々は祈り始めました。神さまの声を聞こうとしました。すると神さまの平和宣言が聞こえてきたのです。

「主は平和を宣言されます。ご自分の民が愚かな振る舞いに戻らないように」。愚かな振る舞いとは、失望して、エルサレムの再建を諦めてしまうことです。目標を失った民は、意欲を失い、投げやりになります。そしてせっかく解放されたのに、周りの敵対者に干渉され、その支配の下で暮らすようになってしまいます。自立を失う危機でした。

その時に、祈った人々は神さまからの声を聞き取ったのでした。「大丈夫。救いはすぐ近くに来ているのです。神さまの栄光がエルサレムにいつまでも留まってくださるでしょう。神さまの愛をどこまでも信じて生き抜きなさい。」。ではエルサレムを再建するという大変難しい事業をやり遂げるために、神さまが与えて下さる救いとは、どういうものなのでしょう。

「慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれる」。ここに慈しみとまこととが、また正義と平和とが、出会うとか口づけするという表現で、密接な関係にあると言われています。また正義が雨のように降り注ぐので、まことが豊かに成長し実るとも言われています。ここで中心になっているのが正義です。

この時代よりも 200 年以上も前に、大預言者イザヤが「正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものは、とこしえに安らかな信頼である」(イザヤ 32:17)と言っています。イザヤが預言した「正義が生み出す安らかな信頼」と、詩篇 85 編が歌う「正義によって豊かに実るまこと」とは同じだと言えましょう。正義が平和、信頼、まことを生み出すというのです。

「慈しみとまことは出会い」とは、この詩の 3 節に述べられているように、「悔い改めることをせず、遂に国を滅ぼしてしまったイスラエルの罪を、それでも赦し、すべての咎を覆ってくださった神の真実、神の愛」を示していると思います。そうだとしますと、正義が造り出す平和とは、「一切の罪を赦し、覆ってくださる神の愛、その恵みを頂いて神の真実に深い信頼を寄せる人々の心に、そしてその人々の間に造り出されていく平和」ということになります。赦しの愛、そこから生まれる安らかな信頼が核になっている平和、それが神の正義なのですね。

[2]赦されて赦す

恐ろしい犯罪が次々と起ります。裁判で判決が出ます。しかしそれで事件が解決したわけではありません。たとえ加害者が死刑になり、命で罪を償ったとしても、それで遺族の悲しみや怒り・憎しみが癒されるものではありません。赦すことが出来て初めて心に平安が回復するのです。正義が単に法律の執行だけで終わるならば、平和は生まれません。警察や司法だけでは、社会秩序を守ることは出来ても平和は造り出せないのです。救いは得られないのです。

ここに魂に深い癒しと平安を与え、私たち人間の人格を穏やかに整え直して社会生活に送り出していくという、宗教の大切な使命と役割があるのではないのでしょうか。では私たちの場合は、どこから深い癒しを得るのか。言うまでもなくイエス・キリストからです。

イエス・キリストは「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(マタイ 5:44~45)とおっしゃいました。神さまは悪人・善人を問わずすべての人の父であり、一人ひとりを分け隔てなく愛し、恵みを注ぎ、祈ってくださるお方なのです。

またイエス・キリストは理不尽に逮捕された時に、剣を抜いて敵と戦おうとしたペトロに向かって、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆剣で滅びる」(マタイ 26:52)とおっしゃりながら、ペトロから耳を切り落とされた人の傷を癒しておられます。更に「自分を救え、他人を救ったのに自分を救えないのか」と罵倒される中で十字架に架けられながら、「父よ、彼らをお赦してください。自分がなにをしているのか知らないのです」(ルカ 23:34)と祈って、死んでいかれました。神さまはそのイエス・キリストを墓の中から復活させて、十字架の死が敗北ではなく、罪を赦して救う神の愛の勝利であることをお顕わしになったのでした。

私たちは、私たちを救うために、イエス・キリストとなって私たちと共にいてくださる神さまのお姿をはっきりと確認できます。このイエス・キリストを、自分の救い主と信じて、このお方の手の中にわが身を委ねる時に、私たちの心に神の赦しの恵みが注がれて、深い平安をいただき、癒されます。そして怒り・憎しみから解放されて、人の罪を赦し和解できるようになるのです。

私たちのシンガポール赴任の道を開いて下さったのは、シンガポール・バプテスト連盟総主事チャン牧師のお母さんの祈りでした。お母さんは中国本土の教育大学を卒業し、シンガポールの女子教育のために招かれた方です。独身で通された方ですが、自分でも子育ての経験をしたいと願って居られました。そこへ骨と皮ばかりの赤ん坊が連れてこられました。親が貧しくて育てられないというのです。彼女は懸命に育てました。

日本軍がシンガポールを占領しました。お母さんが心血を注いで作り上げてきた南洋女子中学校は日本軍に接收されてしまいました。チャン少年の実の父親は日本軍に殺されてしまいました。やがて平和が戻り、お母さんは南洋女子中学校の校長を永く勤め上げて引退されました。しかし日本人に対する憎しみは癒されません。その姿を見て牧師になっていたチャン先生が、とうとう或る日お母さんにこう言ったそうです。「お母さんは熱心な信仰者なのに、どうしていつまでも日本人を赦せないのですか」。

お母さんは、顔色を変えて二階の部屋に閉じこもってしまいました。一週間経ちました。部屋から出て来たお母さんが息子にこう言ったそうです。「貴方の言う通りです。私は間違っていました。神さまに祈って、私の罪を赦していただきました。日本人を赦します。日本人が救われるように日本へ行って、宣教師を送るよう頼んでください。日本人にイエスさまの福音を聞いてもらいましょう。」

喜美子は「どうせ札幌を離れてアジアに出ていくのなら、貧しい子供たちが沢山いるマニラかジャ

カルタに行きたい」と言って、シンガポール行を拒んでいました。しかしチャン先生の証を聞いて、一週間祈りに祈って、十字架のキリストの赦しを頂き、赦す心を与えられ、憎しみから解放されたお母さんの祈りにお応えしなければと、シンガポール行を決心してくれたのでした。赦されている自分・こんな自分に注がれている神さまの愛に気が付いた時に、赦す心を与えられ、憎しみや怒りから解放されるのです。

[結]十字架による平和

私は正義という言葉に恐ろしさを覚えます。戦争中に繰り返し歌った軍歌が忘れられないからです。「天に代わりて不義を撃つ、忠勇無双の我が兵は」。正しい道理に外れた相手の不義・邪悪を、天に代わって成敗し、正義を打ち立てていくために戦うのだというのです。両方が正義の旗を掲げて、相手の不義を倒そうと殺し合うのです。誰が正義と不義を判断するのでしょうか。天、神さまです。ところが一部の人間が天に代わって判断し、正義の旗をかざします。

内村鑑三は「戦争はすべての罪悪を総括したものである。罪悪之れ戦争なりと言うも少しも過言ではない」と言いました。私たち人間は、罪悪の塊をわが身に抱えて正義の旗を掲げて殺し合いを繰り返すのです。人間の正義は本当に恐ろしい。しかし聖書は言います。「神は、十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」(コロサイ1:20)

十字架の血とは、人々の罪の赦しを祈りつつ死んでいかれたイエス・キリストの十字架の死です。「敵を愛しなさい。迫害する者のために祈れ」とお命じになり、悪人にも変わらずに恵みを注ぐ真の神さまが、イエスを十字架にかけてご自分の民の罪を赦し、その咎をすべて覆ってくださいました。神さまが私たちと和解して下さったのです。神さまから赦しと和解を戴いて、私たちも人を赦し、和解します。そして平和が生み出されていくのです。

戦後62年間、日本は廃墟の中から驚くべき復興と繁栄を成し遂げました。あれほどひどい罪の数々をアジア諸国に対して犯したにもかかわらずです。ところが私たち日本人は、これを自分たちの優秀さと勤勉さのせいだと誇っています。誇る前に、神さまの赦しがあった。そしてチャン先生のお母さんに見られるように、アジアの人たちの赦しがあったことを見逃してはならないのではないのでしょうか。

私たち日本人の多くは、そのことに気が付いていません。だから傲慢になるのです。だからアジアの人々となかなか和解できないのです。イスラエルの人々は、バビロンで50年間もの長い捕囚生活を送りました。それを自分たちの犯した数々の罪に対する神さまの裁きと受け取りました。そして解放され祖国に帰還出来た時に、神さまの赦しを見たのです。私たちは敗戦に、自分たちの大きな罪深さを自覚したのでしょうか。戦後の復興・繁栄に、神の赦しと憐れみを見たのでしょうか。

詩篇 85 編は「正義は御前を行き 主の進まれる道を備えます」で終わります。敵を愛しなさい。

剣を取る者は皆剣で滅びる。父よ、彼らをお赦してくださいと祈るお方の前を進み、その道備えをする正義、この正義から和解が生まれ、平和が造り出されていくのです。

完